

# 子供が課題をもって学習するカリキュラムを

アドヴァンス・サロン 17号(1984年、能力開発工学センター)より

矢口 新<sup>註</sup>

**わが国の教育は**上からの押しつけで、子供の興味関心に訴えて学習させるという性格が稀薄だということは、随分前から言われつづけて来た。そういう努力を先生たちがしていないという訳ではないが、なかなかつぼにはまらないようである。なにしろ入学試験があるから、そうしようと思っても、なかなかできないのだという人もいる。なる程、今となっては、そういうこともないではないが、その試験とかテストで選択するという考え方自体がどういう考え方から生まれて来ているのかという反省が足りないのではないか。それは原因であるより、結果なのではないか。

**試験とかテストによって**選抜するという考え方そのものには、覚えることが決まっっていて、それを覚えていることが重要であるという考え方が非常に強いのではないか。そしてそれをペーパーの上でテストするという考え方も、あまりに時代遅れの考え方ではないだろうか。そこには教育における古い言語主義の呪縛があるように思われる。それはまた教科書主義といわれるものと深い関係がある。教科書を覚えることが勉強だという考えは人々の中に牢固としてあって、抜きがたいもののように思われる。それがまた教科書検定の問題ともつながっていて、一字一句に文句をつけて、言葉を大切にするという権力者の姿勢をつくりあげている。そんなことは、学習者が具体的にどんな能力を持つべきかということを考えてみると、殆んど問題にならない事なのである。

**学習する者が**本当に身につけなければならないことは、今自分の目の前にある具体的な事実、自然現象であれ、社会現象であれ、技術であれ、その対象に向って、自分で分析をし、整理をし、自分ではっきりと納得し始末をつけることができるということであろう。それは教科書を覚えるということとは全く違うのだ。それは、読み書きという言葉をも身につけ、文字を使うことを身につける学習でも全く同様であって、教科書を覚えることでは、言葉を使うことさえ身につかないのだ。

**現代の教育で**一番欠けているのは、学習する者が、自分の問題、課題を彼等なりにもって、それを解決していくという過程になっていないということなのである。つまり学習者が課題をもってそれを解こうとして学習していないということである。別な言い方をすれば、カリキュラムが知識注入主義、結果としての言語的知識を与えるのが教育だという考え方の上に構成されているということである。人は言うかもしれない。課題を解決するには、まず知識を与えなければ出来ないのではないか、学校でやることは、そういうことであるべきだと。そういう考え方では結局どこまでいっても、これは必要な知識だということになって、永久に課題の世界には入れない。そうなると課題をとくのは、学校卒業の後でやることだということになる。そうなると大切な知識を身につけたかという考え方になり、ペーパーテストということになるのである。

**学習者なりの課題**をもたせるとするのは、考えてみると、なかなか深い哲学的思考が教育者の側に必要なのだ。しかし次のように考えるとよい。昔狩猟時代に弓を射ることは必要であるが、子供は小さな弓をもって親に着いて歩いて狩猟をおぼえた。この考え方である。社会のもっている課題は、すべて子供の世界でも

何等かの課題として成り立ちうるのだ。それを解決することを子供の頃から工夫させるのである。現代社会がコンピュータ処理能力を必要とするなら、それを子供の世界に適した小さな弓（それをシュミレーションとってよい）として子供がぶつかって行くようなものにすることである。そういう考え方がないのは現代人が原始時代の大人にも劣るということだろうか。それが子供に影響して、ロボットの如き、ブローラーの如き若者が生まれて来る原因のような気がする。

カリキュラムを課題中心に切りかえることが緊急の仕事であろう。（了）

\*矢口 新（やぐちはじめ、1913～1990）能力開発工学センターの創設者。初代所長。